

南北

横光利一

青空文庫

一

村では秋の収穫時が済んだ。夏から延ばされていた消防慰労会が、寺の本堂で催された。
漸く一座に酒が廻った。

その時、突然一枚の唐紙からかみが激しい音を立てて、内側へ倒れて来た。それと同時に、秋三と勘次の塊りは組み合つたまま本堂の中へ転り込んだ。一座の者は膝を立てた。

暫くすると、人々に腕を持たれた秋三は勘次を睥にらみ乍ら、裸体の肩口を押し出して、
「放せ、放せ。」と叫んでいた。

勘次はただ黙つて突き立つたまま、ひた押しに秋三の方へ進もうとした。

「今日という今日は、承知せんぞ！」

「何にッ！」

二人は羽がい締めこいつにされた闘鶏のように、また人々の腕の中で怒り立った。

「放してくれ、此奴逝こいつわさにや、腹の虫が納るかい。」

「泣きやがるな！」

「何にッ！」

秋三は人々を振り切った。そして、勘次の胸をめがけて突きかかると、二人はまた一つの塊りになって畳の上へぶつ倒れた。酒が流れた。唐の芋が転がった。

「ほう
抛り出せ。」

「なぐれ。」

「やれやれ。」

騒ぎの中に二人の塊りは腰高障子を蹴脱した。と、再びそこから高縁の上へ転がると、間もなく裸体の四つの足が、空間を蹴りつけ裏庭の赤万両の上へ落ち込んだ。葛と銀杏くす いちようの小鉢が蹴り倒された。勘次は飛び起きた。そして、裏庭を突き切って墓場の方へ馳け出すと、秋三は胸を拡げてその後から追っ馳けた。

二

本堂の若者達は二人の姿が見えなくなると、彼らの争いの原因について語合いながらまた乱れた配膳を整えて飲み始めた。併ししか、彼らの話は、唐紙の倒れた形容と、秋三の方が

勝味であつたと云うこと以外に少しも一致しなかつた。が、この二人の争いは、彼らにとつて眼新しいものではないらしかつた。彼らの話に拠ると、二人の家は村の南北に建つていて、二人の母は姉妹で、勘次の母は姉であるにも拘らず、秋三の家から勘次の父の家へ嫁いだものであつた。けれども此の南北二家は親戚関係の成り立つた当夜から、既に絶縁同様になつていた。と云うのは、秋三の祖父が、血統の不浄な貧しい勘次の父の請いを拒絶した所、勘次の母は自ら応じてその家へ走つたことから始まつた。祖父の死後秋三の父は莫大な家産を蕩尽して出奔した。それに引き換え、勘次の父は村会を圧する程隆盛になつて来た。そこで勘次の父は秋三の家が没落して他人手に渡ろうとした時、復讐おんしゆと恩

酬うとを籠めたあらゆる意味において、「今だ！」と思つた。そして、妻が反対したのに拘らず、彼は妻の実家を立て直して翌年死んだ。以後勘次の家は何事につけても秋三の家の上に立つた。で、何物にも屈伏することを好まない青年の自尊心を感じることに出来る者達程、此の日の二人の乱闘の原因も、所詮酒の上の、「箸で突いた」程度のことから始まつたと自然な洞察を下して、また酒盃をとり上げた。

併し此の噂は村の幾宵いくよさを騒がせた。そして、聴やがて来る冬の仕事の手始めとして、先ず柴山の選定に村人達が悩み始める頃迄続いていた。

三

まだ夕暮には時があつた。秋三は山から下ろして来た櫛くぬぎの柴を、出逢う人々に自慢しやがした。そして、家に着くと、戸口の処に身体の衰えた男の乞食が、一人彼に背を見せて蹲しゃがんでいた。

「今日は忙しいのでう、また来やれ。」

彼が柴を担かついだまま中へ這入ろうとすると、

「秋か？」と乞食は云った。

秋三は乞食から呼び捨てにされる覚えがなかった。

「手前、俺を知っているのか？」

「知るも知らんもあるものか。汝われ大きゆうなつたやないか。」

秋三は暫く乞食の顔を眺めていた。すると、乞食は焦点の三に分つた眼差しで秋三を斜めに見上げながら、

「俺は安次や。心臓をやられてさ。うん、ひどい目にあつた。」と彼から云った。

秋三は自分の子供時代に見た村相撲の場景を真先に思い浮かべた。それは、負けても賞金の貰える勝負に限って、すがめの男が幾度となく相手関かまわず飛び出して忽ち誰にも棹さおのように倒されながら、なお真面目にまたすがめをしながら土俵を下って来る処であつた。彼は安次だ。安次は両親と僅に残された家産を失くすると、間もなく輕蔑された身体を村から消した。最早やそれから九年も経つた。が、今、また秋三は彼を見たのであつた。

「ほんに、お前安次やつたのう。なんと汚い身体になつたもんやないか。触つたら苔こけがめくれて来うが？」

「お母かあを呼んでくれんか？」

「今日はおらんぞ。お前これから何処へ行くつもりや？」

秋三は柴を下ろしながらそう云うと安次の傍へ蹲んだ。

「何処って、俺に行くところがありや結構やさ。」

「歸つて来たんか？」

「歸つたんや。医者がお前、保もたん云いさらしてのう。心臓や。」

「心臓か、えろう上品や病やのう。」

「うむ、もう念仏や。お母はおらんか。」

「お母に何ぞ用があるのか？」

「お前とこで世話になろうと思ってるがの、一つ頼んでくれんかなア？」

「お前、俺とこへ来たのか？」

「うむ、医者めが、もたん云いさらしてさ。」

「それで俺とこへ転げ込んだのやな？」

「お前、酒桶からまくれ落つて、土台もうわやや。お母に頼んでくれよ。おらんのか？」

「好え加減にしとけ。」

秋三は立ち上った。

「おい、頼む頼む。お母に一寸云うてくれったら。」

秋三はそのまま黙つて柴を担おもやごうとすると、

「お前とこ、俺とこの母屋おもややないか、頼むで置かしてくれよ。」と安次は云った。

「俺とこが母屋や？」

「そうとも、誰なと聞いてみい。」

「縁起げんたれの悪いこと云うてくれるな。手前とこは谷川つて云うやら。俺とこは山本や。」

その時、秋三はふと勘次の家と安次の家とは同姓で、その二家以外に村には谷川と名附

けられる姓の一軒もないのに気がついた。してみれば、今安次を勘次の家へ、株内と云う口実で連れていったとしたならば？ 勘次の母の吝りんしよく 加減を知っていればそれだけ、

秋三には彼女の狼狽うろたえる様子が眼に見えた。それは彼にとつて確に愉快な遊戯であつた。

と、忽ち、秋三は安次を世話する種々な煩雜さから逃のがれようとしていた今迄の氣持がなくなつて、ただ、勘次の家を一日でも苦しめてみることに興味を持った。

「おい、南の勘とこへ行かんか。あいつはお前とこの株内や。」

「肴屋さかなか。あんなけちんぼは、俺とこの株内やないぞ。」

「そうかて谷川つて云うのは、あの家一軒ばち有るか。お前とこの株内や。」

「だいたいあの家、俺は好かんのや。」

「贅沢ぬかしてよ。俺が連れてつてやるぞ。立て立て。」

「あつこはとても駄目つて。」

「あくもあかんもあるもんか。手前、あつこへのたり込むのが当り前じゃ。」

「あかん、あかん。」と云つて安次は頭の横で泳ぐように両手を振つた。

「ぐずぐずぬかすな！」

秋三が安次の首筋を持つて引き立てると、安次は胸を突き出して、「アッ、アッ。」と

苦しそうな声を立てた。

「早よ歩けさ。厄介な餓鬼やのう！」

「腹へって腹へって、お前、負うてくれんか！」

「うす汚い！ 手前のようなやつ、負えるかい。」

安次は片手で胸を圧えて、裂けた三尺のひと端を長く腰から垂らしたまま曳かれていった。痩せた片肩がひどく怒って見えるのは、子供の頃彼の家が、まだ此の村で安泰であった時と同じであつた。そして、まだ変らぬものは、彼の姿を浮かばせている行く手に固まつた安泰な山々の姿であつた。

四

西風が吹いて来た。勘次は桑の根株を割って風呂場の下を焚きつけた。煙は風呂場の下から逆に勘次の眼を攻めて、内庭へ舞い込むと、上り^{かまち}框から表の方を眺めている勘次の母におそいかかった。と、彼女は、天井に沿っている店の缶詰棚へ乱れかかる煙の下から、「宝船じゃ、宝船じゃ。」と云いながら秋三が一人の乞食を連れて這入って来るのが眼に

留まつた。

「やかまし、何じや。」と彼女は云つた。

「伯母やん、結構なもんが着いたぞ、喜びやれ。」

勘次の母は店の間へ出て行つて乞食の顔を見た。

「まア珍しい、安次やないか！」

「安次も提灯もあつたもんか、えらい高次じや。」

秋三は店の間をぐるりと見廻した。が、勘次に逢うのが不快であつた。彼はそのまま、帰ろうと思つて敷居の外へ出かけると、

「秋公^い帰ぬのか？」と安次が訊いた。

「もう好えやろが。」

「云うてくれ、云うてくれ。」

「云うてくれつて、お前宝船やないか、ゆつくりそこへ坐つとりや好えのじや。」

「こらこら、俺も行くぞ。」

「阿呆ぬかせ！ 伯母やん、此奴どつこも行くところが無うて困つとるのやが、ちよつとの間、世話してやつとくれ。」

「そんなこと云うて来てお前。」

と勘次の母が顔を曇らせて云いかけると、安次は行司が軍扇を引くときの様な恰好で、
「心臓や、医者がお前、もう持たんと云いさらしてさ。」

「どうしてまたそんなになつたんやぞ？」

「酒桶から落つてのう。亀山で奉公して十五円貰うてたのやが、どだい、こうなつたらもうわやや。医者が持たん云いさらしてさ、往生したわ。」

「ふむ、それは気の毒なことやなア、長いこと見んで、私やもうすっかり見忘れて了うたわ。何年程になるなア？」

「九年や。」

「もうそんなになるかいな、幾つやな、そうすると四十？」

「四十二や。」

「四十二か。まあ厄年やして。」

「厄年や、あかん、今年やなんでも厄介にならんなんらん。」

「そうか、四十二か、まアそこへ掛けやえせ。そして、亀山で酒屋へ這入つてたのかな？」
「酒屋や、十五円貰うてたのやが、お前、どつと酒桶へまくれ込んでさ。医者がお前もう

持たんと云いさらしてのう。心臓や、えらいことやったわ。」

秋三は勘次の姿が裏の水壺の傍で揺れたのを見ると、黙って少し足音を忍ばせる気持で外へ出た。が、勘次を恐れている自分に氣附いたとき、彼は一寸舌を出して笑ったが、そのまま北の方へ歩いていった。

勘次は裏庭から店の間へ来ると、南天の蔭に背中を見せて帰って行く秋三の姿が眼に付いた。

「今来たのは秋公か？」

「お前、秋が安次を連れて来てくれたんやがな。」

安次は急に庭から立ち上ると、

「秋公、こら、秋公。」と大声で呼び出した。

勘次は秋三に逢いたくはなかった。

「安次か、えらく年寄ったやないか。」と彼は安次の呼び声をさへぎ遮った。

「うん、こう鼻たれるようになったらもうあかん。帰れたもんやないけれどさ。とうとうやられてのう。心臓や。お前医者めが持たん云いさらしてのう。どうもこうもあつたもんやない。このざまやさ。」

「どうした？」

「酒桶からまくれてお前、ここやられてのう。」安次は胸を押えてみせた。

「ふむ、よう死なんでこつちやして？」

「死にやお前結構やが、運の悪い時や悪いもんで、傷ひとつしやへんのや。親方に金出さそうと思うたかて、勝手の病氣やぬかしてさ。鏹^{びたせん}銭一文出しやがらんでお前、代りに暇出しやがって。」

「そうか、道理で顔が青いつて。」

「そうやろが。」

「そしてこれから何処行きや？」

「何処つて、俺に行くところあるものか。母屋に厄介になろうと思うて帰つて来たのやが、秋公がお前、南の家は株内やぬかして、引つ張つて来よつたのや、ほんまに済まんこつちや。」

「秋が連れて来たんか？」

「うん、秋がお前、株内はここだけや云いよつてさ。」

「母屋へ行け母屋へ。かまうか、俺がつれてつてやろ。あいつ、ほんまに猾^{ずる}い奴や！」

「お前頼んでくれんか？」

「ええとも、あの餓鬼つたら、仕様のない奴や。」

「そうしてくれのう。土産も何もあらへんけど、二円五十銭持つてるのやが、どうにかならんかのう？」

「要るもんか。」

「要らんか、頼むぜ。」

「行こ行こ。」

「ちよつと待つてくれ、お霜さん、飯ないかなア、腹へって、腹へって。」

「飯か？ 今頃お前、夕飯前でこれから焚くところやがな。」

「ちよびつとでも好え^えがな。」

「じゃ見て来てやるわ。」

お霜は台所へ這入った。勘次は表へ出て北の方を眺めてみたが、秋三の姿は竹藪の向うに消えていた。彼は又秋三とひと争いをしなければならぬと思った。そして、胸の中で、自分は安次を引取することに異議を立てるのではなく、秋三の狡猾^{こうかつ}さに立腹しているのだと理窟も一度立ててみた。が、事實は秋三や母のお霜がしたように、病人の乞食を食客に

置く間の様々な不愉快さと、経費とを一瞬の間に計算した。

お霜は麦粉に茶を混ぜて安次に出した。

「飯はちよつともないのやわ、こんなもんでも好けりや食べやいせ。」

「そうかな、大きに大きに。」

「塩が足らんだら云いや。」

「結構結構。」

安次は茶碗からすが眼を出して口を動かした。

「こりやええ、麦粉かな？」

「こりや麦や、塩加減はええか？」

「上加減や、こりやうまい、お霜さん、わしは酒加減はよう味^みるぞな、一時亀山でや、わしがおらんと倉が持ていでうるさのう。」

勘次は安次を待つのが五月蠅^{うるさ}かった。ひとり出かけて行って秋三の狡^なさを詰^なろうかとも思ったが、それは矢張り自分にとって不得策だと思えつくと、今更安次を連れて来てにじり附けた秋三の抜け目のない遣方に、又腹立たしくなつて来た。

安次は食べ終ると暫く缶詰棚を眺めながら、

「しびは美味いもんや。」とひとり言を云った。

煙は又風呂場の方から巻き込んで来た。お霜は洗濯竿の脱れた音はずを聞きつけて立ち上った。

「お霜さん。煙草一ぷく吸わしてくれんかな。」

「安次、行くぞ。」勘次は云った。

「お前ひとりで行って来てくれんかよ。」

「お前、行かにや何んにもならんが。」

「もうお前、ひ怠だるてひ怠るて歩けるか。」

「たったそこまでやないか、向うまで行ったら締めたもんや。お前図々しい構えてりやことがあるかい。」

「堪こらえてくれ。もうもうお前、今夜あたりでも参るかもしれんのじゃ。」

「そんなことを云うてらちがあくか。」

「こらかなわんのう。」

「行こつて、行こつて、悪るうなりや俺が引き受けてやろぞ。」

「もうお前。」

「行こ行こ、何んじゃ！」

勘次は安次の手首をとった。安次は両足を菱張りに曲げて立ち上った。

五

秋三は麦の種播きに出掛けようと思っていた。が、勘次が安次を間もなく連れて来るにちがいのなろうと思われるとそう遠くへ行く気にもなれなかった。で、彼は軒で薪を割りながら暇々に家の中の人声に気をつけた。

よく肥えた秋三の母のお留は古着物を背負って、村々を廻って帰って来た。

「今日は馬が狸橋から落ちよってさ。」

彼女は人の見えない内庭へ這入って大声でそう云うと、荷を縁に下ろして顔を撫でた。が、便所へ行く筈だったと気が附くと、裾を捲って裏口へ行きかけたが、台所の土瓶が眼につくと、また咽喉が渴いているのに気がついた。彼女は土瓶を冠^{かぶ}って湯を飲んだ。そこへ勘次が安次を連れて這入って来た。

「秋公いるかな？」

「お前今日な、馬が狸橋の上から落ちよつてき、そりや豪いこつちやぞな。」とお留は云つた。

「秋公はな！ 今俺とこへ来よつたんやが。」

「知らんぞな。わしや今歸つたばかりやが。お前、馬が横倒しにどぶんと水の中へはまりよつたら見い、馬つたら豪いものや。くれんといっぺんに起き返りよるな。ありや！ 何んじや、お前安次やして！」

「さつき来たんやが、お前いやせんだ。」

安次は怒った肩を撫でながら縁に腰を下ろした。

「どうしてのや？」

「どうつて見た通りのざまや。」

「そうか。安次か。長いこと何処へ言つてたんや！」

「亀山や。」

「亀山か、近いところにいたんやして、お前何んじやぞ、それ瘦せて！ 死神に憑かれたみたいやないか。」

「あかん。」

「あかんつて、どうしたんやぞ。」

「医者がもうお前、持たん云いさらしてさ、心臓や。どだいわやや。」

「心臓や、それは困ったことやないか。まア待つとくれ。」

お留は周章^{あわ}てて厠^{かわや}へ行つた。そして、戻るとき戸棚の抽出しから白紙を出して、一円包んで出て来ると安次に黙つて握らせた。

「あかんのや、あかんのや、もうそんなことして貰うたて。」と安次は云つて押し返した。しかし、お留は無理に紙幣を握らせた。「薬飲んでるのか？」

「いいや、此の頃はもう飲みとうない。」

「叔母やん、秋がさつき来てな、安次を俺とこへ置いとけて云うのやが、俺とこは困ぜ。」と勘次はきり出した。

「何んやぞ？ わし一寸も知らんが。」

「秋公はひどい奴や、こんな病人を俺とこへ無理に引っ張つて来てさ。」

「そうかな、あいつ何処^{ひと}へ行つとるのやろ。」

「ほんとにあいつは酷い奴やぞ、わざわざ母屋へ頼つて来てるのに、俺とこへ連れて来て、何ぼ何でもあんまりや！」

「わしとこにいりやええわして。」

「阿呆ぬかせ！」と秋三は裏口から叫んで這入つて来た。

「秋公、お前、ひどすぎるやないか。」と勘次は云つた。

「何がひどい。手前とこは株内や、株内が引きとるのに何の不足がある。」

「お前こそ母屋やないか。母屋のなりして、株内へ廻すつてことがあるかい。」

「母屋や、阿呆たれよ、どこがどう母屋や。それを検べてから云うて来い。」

「安次が母屋母屋云うてりや、それで分つてゐるこつちや。何も母屋やないもの頼つて来る理窟があるか。」

「そんなもの、何代前の母屋かしれたもんか。俺とこが母屋やつたら、何処でも母屋や。こんな死にぞこないの、油虫みたいな奴は、どこへたばりさらすか知れるかい。」

「もう止さえせ。昼日中喧嘩して！」とお留は口を入れた。

「お母ア、黙つとりやええんじや。」

「秋公頼むわ。どこへでもええで寝さしてくれよ。」と安次は云つた。

「ぬかしてよ。汝^{われ}や汝で、何ぜ俺とこを母屋やなんてたれるのや。どこで聞いて来た。他^ひ家^とんどこへ来るなら来るで、ちゃんとして来い。」

「そんなに大つきな声出さんでも、ええわして。」とお留は云った。

「いいや、声でも嚇おどしつげんと、こんな奴、何さらすかしれん。」

「阿呆なこと云うてんと、置いといてやらえな。」

「こんな奴置く位なら、石の頭巾冠つてる方が、ましじや。」

勘次は今は引き時だと思った。そして、そのまま黙って帰りかけると、秋三は彼を呼びとめた。

「勘公、此奴をどうするつもりや。」

「どうするって、こちや知らんわ。」

「知らん！ もういつぺん云うてみよ。」

「こちや知らんてことよ。」

勘次は後も見ずに帰っていった。秋三は勘次の後を追ひ馳けようとして二三歩進んだが、又引き返すと、縁へごろりと横になつてゐる安次の襟を持ってひき起した。

「寝さらして、こら！」

「もう勘忍してくれ。」

「勘忍も糸瓜へちまもあるかえ。南へ行きやがれ南へ。」

「もうお前、へたばるが。」

「立てつたら、立ちさらせ。」

安次は蹲んだまま怒った片肩をなお張り上げて、戸口までずるずる引き摺られた。

「そんなことせんと、ここで休ましといてやらえな。」とお留は云った。

「何アに此の餓鬼、にせびよう 鷹病 使うてくさるのや、あつこまで歩けんことあるものか。」

「痛い、痛い、痛いたら！」と安次は云った。

「やかましい、歩け歩け！」

秋三は忙しそうに安次を曳いて、勘次を見守りながらまた南の方へ下って行つた。

お留は安次に渡した一円の紙幣が庭に落ちてゐるのを見ると、走って行って渡そうかと思つたが、しかしそれでは却かえつて追い出すようでないし、

「まア好えわア。」と彼女は呟いた。

それより此の次もう一円増してやる方が、息子の無情な仕打ちを差し引いて功德くどくになるように思われた。彼女は台所へ戻ると又土瓶を冠って湯を飲んだ。

六

勘次は後から追つて来る秋三の視線を強く背中に感じ出した。足がだんだんと早くなった。それに何ぜだか後を見ていることが出来なかった。竹藪を廻ると急に彼は駈け出したが、結局このままでは自分から折れない限り、二人の間でいつまでも安次を送り合わねばならぬと考えついた時には、もう彼の足は鈍っていた。そして今逆に先手を打って、安次を秋三から心良く寛大に引き取ってやったとしたならば、自分の富の權威を一倍敵に感ぜしめもし、彼の背徳を良心に責めしめする良策になりはしないか、と考えついた時には、早や彼は家に帰って風呂の湯加減をみる為に、一寸手さきを湯の中につけていた。が、更に又彼は自分の愛人の姿を思い浮べて考えた。もしそうして彼女が自分の博愛を聞き知ったとしたならば？ それは確に幸福な婚姻の日を、早めるに役立つことになるだろう。

秋三は着いた。不足な賃銀を握った馬丁のように荒々しく安次を曳いて、

「勘次、勘次。」と呼びながら這入つて来た。勘次は黙つて出迎えた。

「これ勘公、逃げさらすなよ。」

「遠いところを済まんのう、何んべんも。」

秋三は急に静な微笑を浮べた勘次のその出方が腑に落ちかねた。

「安次、手前ここに構えとれよ。今度俺とこへ来さらしたら、殴打どやしまくるぞ。」

安次は戸口へ蹲んだまま俯向いて、

「もうどうなとしてくれ。」と小声で云った。

「当分ここにおつたらええが、その中に良うなろうぜ。」

そう勘次が静に云うと、安次は急に元氣な声で早口に、

「すまんこつちや、すまんこつちや。」

と云いながら続けさまに叩こう頭とうした。勘次は落ちつけば落ちつく程、胸の底が爽やかに揺れて来た。が、秋三は勘次の氣持を見破ると、盛り上つて来た怒りが急に折れて侮辱の念に變つて来た。と同時に安次の弱さに腹の底から憎惡を感じると、彼の掌はいきなり叩頭くわうとうしている安次の片頬をぴしやりと打った。

「しつかり、養生しやれ。」

秋三は嘲弄した微笑を勘次に投げた。

「ええか、頼んだぞ。」と彼は云うと、威勢好く表へ立った。

勘次は秋三の微笑から冷たい風のような寒さを感じた。彼は暫く庭の上を見詰めたまま動けなかった。

「すまんこつちやわ、えらい厄介かけてのう、大きに大きに。」

勘次も安次に叩頭されればされる程、不思議に安次を輕蔑したくなつて来た。彼は黙つて裏の井戸傍へ立つて来た。が、秋三の冷たい微笑を思い出すと身体が竦すくんで固まつた。彼は秋三に追いついて力限り打ちめしてしまいたかつた。恋人との婚姻もこのまま永久に引き延ばしていたかつた。そして、安次を最も残忍な方法で放逐ほうちくして了つたならば、彼は秋三の嘲笑を一瞬にして見返すことが出来るように思われた。

七

安次は股引の紐を結びながら裏口へ出て来ると、水溜の傍の台石に腰を下ろした。彼は遠い物音を聞くように少し首を延ばして、癖ついた幽かすかな笑いを脣に浮かべながら水菜畑を眺めていた。数羽の鶏の群れが藁小屋を廻つて、梨の木の下から一羽ずつ静に彼の方へ寄つて来た。

「好えチャボや。」と安次は呟いて鶏の群れを眺めていた。

お霜は遅れた一羽の鶏を片足で追いつつ大根を抱えて藁小屋の裏から現れた。

「また来たんか？」

「また厄介になったんや、すまんが頼むぞな。ええチャボやな。こいつなら大分大つきな卵を産みよるやろ？」

「勘はな？」

「さア、今そこにうろうろしていらったが。」

安次は三尺の中から丸めた紙幣をとり出した。

「お霜さん。これ持っててくれんかな。二円五十銭あるのやが、何ぞの足しに、ならんかな。」

「そんなにたんと預かっておいて、お前使うて了うたらどうするぞ。」と、お霜は笑って云った。

「何アに使うて貰うたら結構や。持っててお呉れ、使い残りで悪いけど、それだけば有りやさんのや。」

「まアお前持つてやいな。お霜さんが安次の金とったなんて云われると、こちや困るわ。」
お霜は家の中へ這入って大根を切った。安次はまた三尺の中へ紙幣を巻くと、

「トトトトトト。」

と呼びながら鶏の方へ手を延ばした。どこかで土を掘り返す鋤すきの音がした。菜園の上からは白い一条の煙が立ち昇っていて、ゆるく西の方へ靡なびいていた。

勘次は吠かますを抱えて蔵の中から出て来ると、誰にも相手にされず、台石の上でひとりぼんやりしている安次の姿が眼についた。それは弱々しいとに残された者の感じで不意に彼の心に迫って来た。と勘次は急に今までと全く違った愛情を安次に対して感じ出した。

「安次、今晚は御馳走を食わそうか、よう？」

「いいや、もう結構や。」

「風呂が沸いてるぞ、お前這入らんか？」

「あかんのじゃ、あいつに這入ると、やられるんじゃ。」

「そうかて、いつまでも這入らずにいられまいが。」

「何アに、もうお前かれこれ二ヶ月這入らんが。」

「二ヶ月よ？」

安次はまた三尺から紙幣を出すと近寄って来た勘次にそれを差し出した。

「お前これ持ってくれんかのう。二円五十銭あるのやが、何んぞの足しになるやろぜ。」

「自分で持ってりやええやないか。」

「こんなもの、五月蠅^{うるそ}うてしょうがないが。」

勘次は安次の諂^{へつら}う容子を見るとまた不快になった。そのまま内庭へ這入って行って吠を下ろすと、流し元にいたお霜が嶮しい顔をして彼の傍へ寄って来た。

「お前まアどうするつもりや、あんな者連れ込んで来てさ。」

「抛^なつておいたらええが。」

「抛^なつておけて、たちまちお前どこへ置くぞ。汚い！ わしは知らんぞな。お前勝手に世話しやいせ。」

「ええが。」

「ええがも無いやないか。お前たちまちどこへ寝せるつもりや。食わす位ならまだ我慢もしよが、どんと寝附かれて動きもこじりも出来んようになったらどうするぞ！」

「抛^なつといたらええつてば。」

「抛^なつといてそれで済むもんならええわさ。それより、お前どこで寝せるぞ、奥の間か？」
「小屋へ置いときやええ。」

「たあいもないお前、あんとこで死なれてみい。五月になったら蚕^{よかい}さん夜養せんならんに誰^{こわ}が恐^{こわ}うて行くもんがあるぞ。お前の阿呆にもあきれるわ。」

「秋が連れて来たんじゃないか、秋に怒ったらええ。」

「秋ってあの餓鬼、どうも仕方のない奴や。ひとん所の恩も知りさらさんとからに、ひとん処へあんな者引つ張つて来やがつてな、私^{わし}今晚喧嘩しまくつてやらんならん！」お霜は眩きながらまた大根を切った。

「米を何んぼ出しよう？」

「連れて来るものがないと、終いにやあんな乞食の病人引つ張つて来さらして！」

「米をよ。」

「一斗でええ。」とお霜はわが子に怒鳴り出した。

八

夜、お霜が秋三の家へ安次を連れて行くと云い出したとき、勘次は秋三の前でいかにも寛大に安次を引き取った自分の態度を思い出した。これは困った。しかし、安次を拒んでいるのは自分ではないと思うと気が休まった。それに母親ひとりでも秋三を説き伏せ終おせるものではないのを知ると、結局また安次は自分の家に落ちつくにちがいないと考

えた。でお霜が出掛けてゆくことには、余り親子争いをしたくなかった彼は、外見、自分も母親同様の考えだと云うことを、ただ彼女だけに知らせるために黙っていた。が、安次を連れて行くことには反対した。けれども、自分のその氣持を秋三に知らさない限り、自分の骨折りが何の役に立つだろう。そう思うと彼には秋三の罵倒が眼に見えた。が、また自分に安次を引き受ける氣持のある以上、敵の罵倒に反抗し得るだけの力は、自然出て来るであらうと思われた。

九

秋三の母はひと^{ざる}笹豆をむき終えた。そこへ姉のお霜は黙って一人這入って来た。

「姉やんか。丁度ええわ。あのな、生^{きじゆす}繻子の丸帯が出たのやが、そりや安いのや、買わいせな。」とお留は云った。

「それよりお前とこの秋って、どうも仕様のない奴やぞ。株内やぬかしてからに、わしとこへお前、安次みたいな者引つ張つて来さらしてさ。お前とこが困るなら、わしとこかて同じこつちや。」

「秋やいくら云うても聞きやせんをやして。あんな者の云うこと生しやいすな。」

「そうかて連れて来られたもの、黙つていられるかいな。」

「うちへ連れて来やいせ。何処かて同じこつちやがな。なア姉やん、中古でな、ほんまに持つて来いやが見せようか。織留のところに一寸した汚点しみがあるのやが、二円五十銭にしとくわな。」

「要らん要らん。銭がないわ。」

「直ぐ売れてしまふで今やなきやあかんぞな。銭なんていつでもええわ。上村の三造さんの嫁さんに頼まれてるのやで、姉やんが要らんだら持つていくけど。」

「わしらそんな良ええのしたかて、何処へも見せに行くところがないわ。」

「そんなこと云うてたら、裸体でいようかしらず、まアいっぺん見てみやいせ。」

お留が奥の間へ立つていった後へ、秋三は牛の雑炊ぞうすいをさげて表の方から歸つて来た。

「秋よ、お前もお前やないか、とうとうわしとこへ安次をにじりつけてき。」と、お霜は云った。

秋三はお霜の来た用事を悟ると痛快な氣持が胸に拡った。彼はにやにやしなから云った。「にじりつけるか。勘が引受けよつたのやないか。勘に訊きいてみい、勘に。」

「連れて来んもの、誰が引受けるぞ。」

「そりやお前、お前とこが株内やで俺が連れて行くのはあたり前の話や。」

「お前株内や株内や云うけど、苗字みょうじが一緒やで株内やと定つてまいが、それに自分勝手に私とこへ連れて来て、たちまちわしとこが迷惑するやないか。」

「定つてら、あんな物に迷惑せんところて、あるもんか。」

「そんならなせわし所へ連れて来た？」

「伯母やんみたいなしぶつたれや、あんな奴の世話、いっぺん位しといてもええぞ。」

「お前つて、ても焼いても食えん奴やぞ！ 業ごうざらし。」

「また喧嘩けんかしてるわ。もう止させ。」とお留は、帯を持って出て来て云った。

「こんなしぶつたれ婆と、誰が喧嘩するか。」と秋三は笑って見せた。

「お前、黙つていやいて云うのにな！」

「こいつ、どうしたらええ奴やろ！」とお霜は秋三を睥にらんで云った。

「姉やん見やいせ。良え光沢つややろが。汚点しみが惜しいことにちよつと附いてるのな。」
お霜は差し出された丸帯を見向きもせず、

「いまに思いしらせてやるわ、覚えてよ。」とまた云った。

秋三は「帰ね帰ね」と云うとそのまま奥庭の方へ行きかけた。

「何を云うのや！ 姉やん、あんな奴に相手にならんと、まア一寸此の帯を見やいせな。」

「そんなもの、どうでもええわ。それよか、安次のことをきりつくと私とこが困るわ。」

「安次ならうちへ連れて来てたもれ。なア、手にとつて見てみやえな。中古でも夜さりやと新に買うたように見えようがな。」

「そんなら安次を連れて来るぜ。帯は後でゆつくり見せて貰うわ。」

「あかんど、あかんど！」と秋三は叫ぶと、奥庭から柄杓ひしゃくを持って走つて来た。

「うちへ置いといてやつてもええわして。」とお留は云つた。

「あかん。」

「そんなこと云うてたら、仕方あらへんやないか。」

「あかん、あかん。」

「おかしい子やな。あんな死にかけてる者、何処へ行くところがあるぞ、可哀想に。」

「あんな腐つた鰯いわしみたいな奴と一緒にいたら、虫が湧くわ。」

「そんな無茶苦茶云うてんと。」

「あかんつたらあかん。南のが引き取りやそれでええんじや。」

「お前とこ虫が湧きや、わしとこでも虫が湧くわ。」とお霜は云った。

「勘が引受けよったんや。不足があるなら何処へでも抛り出しゃええ。俺とこはもう関係があるもんか。」

「勘が引受けたって、勘はお前、お前が無理に連れて来たで、置いたままでのことやないか。」

「どう云うたかよう勘にきいて来い。」

「勘は知らんと云うとつたが。」

「知らん？ よしッ、そんなら勘を呼んで来い。殴打どやしまくってやるぞ。」

「秋よ、もう黙つていやいせ！」とお留は叱った。

「いいや、勘の餓鬼、豪そうな顔して引受けさらしたくせに、そんなほざいたことをぬかしてるなら、こちにも考えがあるわ。」

「ひちくどい！ もうええわして。」

「云うとこまで云わにやことが分るかい。勘を呼んで来い、勘を。」

「姉やん、もうこうなったら本当にきりがないでな。姉やんとこ今晚ひと晩、安次を置いてやつとくれ。」

「そんな鳥とりもち糺桶へ足突つこむようなこと、わしらかなわんわ。」とお霜は云った。

「ひと晩でええわ。そしたら明日どこぞへ小屋建てよう、清溝しみぞの柿の木の横へでも、藁でちよつと建てりやわけやないわして、半日ひんなかで建つがな。」

「それでもお前、十五六円やそこらかかるがな？」

「その位はそりやかかるわさ。そやけど瓦のかけらでもあろまいし、藁ばつかしで建てたら後が何なと間に合うがな、なア、そうしようまいか？」

「藁かて二三十束も要るやないか。」

「そんなもの、高が知れてるわして。あんな安次みたいな者を世話しといたら、功德になるぞな。」

「ひんなかで建つやろか？」

「そればつかしにかかりや半日ひんなかで建つやろまいか。皆で建てよまいか。そしたら私やお粥位かゆ毎日運んでやるし、姉やんとこ抛つときやええわ。」

「そうしようか、藁三十束で足るかお前？」

「足るとも。三畳敷位の小つちやいのでけっこうやさ。それで安次も一生落ちつけるのや、有難いもんやないか。」

「あんな奴、抛つとけ。」秋三は笑いながら云った。

「阿呆ばっかし云うて！」とお留は叱った。

「あんな碌ろくでもない奴は、人目につかん処で死にさらしやええんじや。」

「お前はよつぽど罰あたりやぞ！」

「俺が罰あたりなら、南の伯母やんら、とつくの昔罰あたって死んでら。のう伯母やん？」

「あれ見やえ！」とお留は云つて姉を見た。

お霜は何か考えているらしく黙っていたが、

「お前、小屋建てるなら組で建てて貰うまいか？」と云い出した。

「組が建ててくれりや結構やけどなア。」

「そりや建てるわさ。いっぺん組長さんに相談してみよまいか？」

「どうなと勝手にせ！」と秋三は云つて又奥庭の方へ這入って行った。

「そんなことしてると、またごてごて長びくでな。」とお留は云った。

「そうかてお前、実の所は組が引きとらんなんのやして、お前とこが母屋や云うたて、そんなこと昔から云うてるだけで、何も特別と安次とこと交際してたわけでもなしさ。うちかて株内や云うたてはつきりしたことつて何一つないのやし、組が引取らんなんのや。」

なアそうやろう？ その間、わし処に安次を置いとくわ。」

「そんねにうまい工合にいくやろか？」

「まア事は何でもあたってみよや。組長さんに相談してみよにさ。」

「そうしてみるか？」

「なア？ わし、これから行つて来るわ、事は何んでも当つて見よや。何も母屋や株内や云うたかて名だけや。わし一寸これから行つて来うぞ。」

お霜は外へ出ていった。

「しぶつたれ！」と秋三は奥庭から叫んだ。しかし、勘次と反馳はんちしてゆくお霜の出方がますます彼を喜ばしめた。

「こりや面白い、こりや面白い。」と、秋三は膝を叩いて喜び出した。

お留は丸帯の汚点をランプの下に晒さらしてみた。小指の爪で一寸擦ると、

「こりや姉やんに持って来いやがなア。」と云いながらまた奥の間へ這入っていった。

安次の小屋が組から建てられることに定つたと知つたとき、勘次は母親をその夜秋三の家へ送つたことを後悔した。しかし、今はもうその方が何方どちらにとつても得策であるに拘らず、強しいてそれを打ち壊してまでも自分は自分の博愛を秋三に示さねばならないか？ いやそれよりも、一体秋三とは何者か？ そう思うと、彼は今一段自分の狡猾さを増して、自分から明らかに堂々と以後一家で負う可き一切の煩雜さを、秋三に尽く背負わして了つたならば、その鮮かな謀叛むはんの手腕が、いかに辛辣しんらつに秋三の胸を突き刺すであらうと思われた。

彼は初めて秋三に復讐し終えたような快活な氣持になつた。

十一

一週間の後、小さな藁小屋が掘割の傍に建てられた。そこは秋三の家に属している空地であつた。

その日最早や安次は自由に歩くことも出来なくなつていた。彼は勘次の家の小屋から戸板に吊られて新しい小屋まで運ばれた。

勘次は自分の手から全く安次が離れていったのだと思うと、今迄の安次に向つていた自分の態度は、尽く秋三に動かされていた自分の頭の所作事であつたと気が附いた。けれども別に何の悔い心も起らなかつた。ただ彼は自分の博愛心を恋人に知らず機会を失つたことを少なからず後悔した後で、それほどまでも秋三に踊らせられた自分の小心が腹立たしくなつて来た。が、曾て敵の面前で踊つた彼の寛大なあのひと踊りの姿は、一体彼の心の何処へ封じ込まねばならないのか？ 彼は次第に不機嫌になつて来た。

「厄介者が行つてくれたんで、晴々するわ。あんな者にいられると、こちまで病氣つくがな。」

お霜は安次の立つた後の掃除をしながらそう勘次に云つた。勘次は何ぜだか母親に突きかかつていきたくなつたが黙つていた。

「それでもお前のお蔭でみやいせ、蒲団三枚も損したわ。あの蒲団かて手織やが、まだそんねに着やさんのやぞ。お前ら碌なことしやさんのや。」

「好きで誰が連れて来る！」と息子は強く云つた。お霜は何ぜ息子が怒り出したのかを疑いながら、

「お前が要らんことせなんだら誰が来るぞ！」と云い返した。

「済んでから、ごてごて云うな！」

「云う云う。お前の阿呆にもあきれるわ。」

「勝手に饒舌^{しゃべ}つてよ！」

「要らんことばつかしてな。お前ら自家^{うち}の財産減らすことより考えやせんや。」

「安次の一疋やそこら何んじや。それに組へのこのこ出かけていって恰好の悪いこと知らんのか！」

「何を云うのや、お前！」

お霜は勘次をじつと見た。

「しづつたれ！」勘次は小屋の外へ出ていった。

お霜は何ぜ勘次が怒るのか全く分らなかつた。が、自分の吝嗇の一事として、曾て勘次を想わない念から出たことがあつただろうか？ 彼女は追つ馳けていって自分の悩ましさを尽く勘次に投げかけてやりたくなつた。すると涙が溢れて来た。

お霜が安次の小屋へ行つてみたとき、もう組の人達は帰っていた。

「厄介ばっかしかけて、ほんまにすまんこつちや。」

安次はお霜を見ると弱々しい声で云つた。お霜は彼の声からいかにも有難そうな氣持を感じると初めて愉快になつて來た。

「きようは天氣がよいで氣持好かるが、ここにいたらお前、ええ隠居さんやがな。」

彼女は貸した安次の着ている蒲団を一寸見た。そして彼が死んでからまだ役に立つかどうかと考へたが、彼女の氣持が良ければ良いだけ、安次を世話した自分の徳が、死んだ良人の「あの世の苦しさ」まで滅ぼすように思われてありがたくなつて來た。彼女は入口の筵戸むしろどを捲き上げた。陽の光りは新しい小屋いっぱいに流れ込んだ。病人の頬や眼窩がんかや咽喉の窪みに深い影が落ちて鎮まつた。お霜は床に腰を下ろすと、うつとりしながら眼の前に拵こしらへっている茶の木畑のよく刈り摘まれた円い波々を眺めていた。小屋の裏手の深い掘割の底を流れる水の音がした。石橋を渡る駄馬の蹄の音もした。そして、満腹の雀は弛たるんだ電線の上で、無用な囀さえずりを続けながらも尚おいよいよ脹ふくれて落ちついた。

「姉さん、すまん、今お医者さんとこへ行つて來たんやわ。もう来てくれやつしやるやろ。」

暫くしてお霜はお留に呼び醒まされて彼女を見た。

「どうや、一寸はええか？」とお留は安次を覗いて訊いた。

「すまんこつちや、皆に厄介かけるなア。」

お霜は妹にそう云っている安次の声からも感謝の気持を見出した。そして、自分が預る「仏の利生^{りしやう}」を、それだけ妹の方に分けられはすまいかと、今さら不安な気持が起つて来ると、自分よりも先に医者を迎えに行つたお留の仕打ちに微かな嫉妬を感じて来た。

「何ぞ欲しいものはないか？」とお霜は安次に訊いた。

「結構や。」

「お前この間、錢持つてたの、どうしたぞ。それだけ欲しいもんでも買う方が好かるが？」

「火ん中へ燻^くべて了うた。」

「燻^くべた！」

「邪魔になつて仕様がない。」

「たあいもない。どうや、あんな物燻^くべて何んにもならんやないか！」

「もう半分気が触れてるのやぞ。」とお留は云つた。

二人は暫く安次の痩せ衰えた顔を黙つて眺めていた。すると、どちらも同じように、病

人が最早や自分達と余程離れた不思議な遠い世界に居ることを感じて恐ろしくなつて来た。が直ぐその後で、お霜は病人が紙幣を自分に預つてくれと頼んだとき、預つておけば好かつたと思つて後悔した。だが、お留は、安次に与えようとしてまだそのままにしておいた金包のことを思い出すと、今まで忘れていたのは結局自分に仏様がそれだけ授けて下さつたのだと思つて喜んだ。

十三

霜が降りた。夜が明け初めると間もなくその日は晴れ渡るであらう。山々の枯れた姿の上には緑色の霞が流れていた。いつもの雀は早くから安次の新しい小屋の藁条わらすじを抜きつつは巢に歸つた。が、一疋の空腹な雀は、小屋の前に降りると小刻みに霜を蹴りつつ、垂れ下つた簷戸の隙間から小屋の中へ這入つていった。

中では、安次が蒲団から紫色の斑紋を浮かばせた怒いかつた肩をそり出したまま、左右に延ばした両手の指を、縊くびられた鶴の爪のように鋭く曲げて冷たくなつていた。が、雀は一粒の餌さえも見附けることが出来なかつた。で、小屋の中を小声で囀りながら一廻りすると

外へ出て来て、また茶畑の方へ霜を蹴り蹴りぴよんぴよんと飛んでいった。

十四

野路では霜柱が崩れ始めた。お霜は粥を入れた小鉢を抱えたまま、

「えらいこつちや、えらいこつちや。安次が死んだ。熱いお粥食わそう思つて持つててやったのに、死んだわア。」と叫びながら、秋三の家の裏口から駆け込んだ。

お霜の叫びに納戸からお留が出て来た。秋三は藁小屋から飛び出て来た。そして二人が安次の小屋へ馳けて行くと、お霜はそのまま自分の家へ馳けて帰つて勘次に云つた。

「お前えらいこつちや。安次が死によつた。折角お粥持つててやったのに、冷とうなつて死んだのやして。」

「死によつたか！」

「えらいこつちや、えらいこつちや。」

お霜は小鉢を台所へ置くと、さて何をして好いものと迷つたが、別に大事な出来事が起つたのでもなく、ただ自分ひとりが勝手に狼狽うろたえているのだと気が附いた。が、その狼

狼えたどこかには、常より却つて晴やかな氣持が流れていたことには彼女とても氣附かなかった。

十五

勘次とお霜は直ぐ又安次の小屋へ行つた。勘次は初め秋三と顔を合すのが不快さに行きたくはなかつたが、それは却つて秋三を恐れているようにいけないし、とうとう何時の間に決心したのか自分ながら分らずに、ただ母親に曳かれる氣持で小屋へ來た。

「おい、喜びやれ、往生しよつたぞ。」

秋三は勘次を見るなり皮肉な微笑を浮かべて云つた。

勘次は彼の微笑から曾て覺えた嘲弄を感じると、憤りが胸に込み上げた。が、それを見抜かれるのが不快であつた。彼は入口に下つていた簾戸を引きちぎつて、

「こんな邪魔物は要らんやろが。」とごまかした。

「伯母やんに訊いてみよ、神棚へでも吊らつしやろで。」

勘次は秋三を一寸睥^{にら}んだが、また黙つて霜解けの湿った路の上へ簾を敷いて上から踏ん

だ。

「さアお前らぼんやりしてんと、どうするのや？」とお霜は云った。

「和尚さん呼んで来うまいか。」とお留は云った。

「それよか何より棺桶や。棺桶どうする？」と秋三は云い出した。

「うちのお父つあんの死んだときは棺桶やつたが、あれでもお前、八円したぞな。」とお霜は云った。

「六分板やろが。あれならその位かかるわさ。杉の四分板やつたら五円位で出来るやろ。」とお留は云った。

「大分苦しみよつたらしいな。」

勘次は安次の紫色に変わっている指さきを弄びながらそう云うと、

「苦しかったやろまいか。可哀想に、水いっぱい飲ましてくれる者がありやせんしさ。」とお留が云った。

「やつぱり極道すると、碌な死にざま出来やせんなア。」とお霜は云った。

「棺桶どうする。」と秋三はまた云い出した。

「箱棺で好かろが。あれなら三円位で出来るしな。」

「寢棺はどうや、もつと安かるが？」

「寢棺は高い高い。どんねに安うても十両はかかる。」

「そうか。そんなら箱棺の口や。どうや伯母やん。ひとつ奮発してくれんか？」

「伯母やん。伯母やんって、損のいくことやったら、何んでもわしににじりつけるのやな。わしとこはもう、蒲団出したやないか。お前とこしてやれ。」

「そうかて、本当に勘が何もかも引き受けよったんやないか。そのくせ組へにじりつけて了うてき。棺桶ぐらいしてもええぞ。」

「うちのがしたらええわして。」とお留は秋三をたしなめた。

「俺がする。」と勘次は云った。

「それみよ。」と秋三は煽おだてて云つて、勘次の額に現れ始めた怒りの条を見れば見る程、ますます軽快に皮肉の言葉が流れそうに思われた。

「勘よ、うちにビール箱が沢山あつたやろが、あれで作ったらどうやろな？」とお霜は云い出した。

秋三はにやにや笑いながら、

「そいつは好え。あれなら八分板や、あんなもんでして貰うたら、それこそ極楽へ行きよ

るに定つてゐる。やつぱり伯母やんやなけりや、ええ考えが出て来んわ。」

「なア、あれはほんとに好かるが、三つ位で出来るやろ。」

「二つでええとも。あれでして貰うたら、安次もなかなか腐らへんわ。そりや結構や。」とお留は云つた。

「勘よ。お前これから帰んで、一寸拵こしらえて来てくれんか。」

勘次は黙つて歸つて来た。母親が煽動に乘せられているのを思うと、別に大工の手にかけて棺を造ろうかと思つた。が、しかし一々秋三に反抗するのもあまり大人気ないように思われた。が、何かにつけて自分の弱味——安次を組の手に押し附けたと云う此の弱味、それは自分の知らないことだと彼一人拒否したとて免れないその点に、——絶えず触れて出ようとする秋三の態度には我慢がしきれなかつた。彼は柵からビール箱を下ろすと、一枚一枚釘打で板を放した。放しながら、秋三を叩いている所を想像すると、尚お彼の力は加わつた。

「此の餓鬼！ 此の餓鬼！ 此の餓鬼！」

彼は釘打を振り上げては打ち下ろした。すると、自分が棺を造っているのだと云うことも忘れて了つて、だんだん加わつて来る氣持良い興奮の中に、間もなく彼は三つの箱をば

らばらの板切れにしてしまった。そして、一時間の後には旭あさひの紋の浮き上った四角い大きな箱棺が安次の小屋へ運ばれていた。

十六

「こりや上等や。こんななら俺でも這入りたいが。どうや伯母やん、一寸這入ってみやえ。」と秋三はお霜に云つて、勘次の造つて来た箱棺を叩いてみた。

「冗談云わんと、早よ安次を入れてたもれ。」とお霜は云つた。

「こんな汚い奴、俺や知らんぞ。」

「何でも知らん知らんと云うてよ。」

お霜は安次の蒲団を捲つて、「早う。」と秋三を促した。

「おい、掻き込もうやないか、汚い。」

秋三は勘次にそう云つて棺を横に倒すと安次の死体の傍へ近寄せた。

二人は安次の身体を転がしながら、棺の中へ掻き寄せようとした。が、張り切った死人の手足が縁につかはめて嵌はままらなかった。秋三は堅い柴を折るように、膝頭で安次の手足の関節

をへし折った。そして、棺を立てると身体はござりと音を立てて横さまに底へ^{すべ}に落ちた。
秋三は棺を一人で吊り上げてみた。

「此奴、軽石みたいな奴や。」

「そやそや、お前今頃から棺桶の中へ入れたらあかんがな。お医者さんの診断書貰うて、役場へ死亡届出さにや叱られるわして。」とお留は云った。

「そんなら、もういつペン打ちやけるか？」

秋三はお霜を眺めてそう訊くと、お霜は安次の着ていた蒲団を摘まみ上げて眺めた。
「そんな汚い物、焼いて了え。」と秋三は云った。

「よう云うてくれるな。これでもお前、洗濯してちゃんとしたら、結構間に合うわ。」

「まだそれでも、着て寝よう思うてるのやな。」

「きまつてるわ。」

「しぶったれ！」

「何がしぶったれや！」

「まアまア伯母やんみたいなしぶったれて、あつたもんやないわ。」

すると、お霜はいつになく厳しい眼付で秋三を睥みながら腰を延ばした。

「よう云うな！ 汝^{われ}や自分の棟の下で飯が食っていけるのは、誰のお蔭やと思うてる。此のしぶつたれの伯母が有ってこそやぞ。それも知りさらさんとからに、渋つたれ渋つたれって一寸は人の恩も考えてから云いや！」

「ぬかしてよ！ 俺とこが恩受けてるのは、手前とこの親父にじや。」

「わしがいなんたら、誰がお前らに恩を施すぞ！」

「恩恩って、大つきな声でぬかすな！ 手前とこが有るばつかしで、俺とこまで穢^{けが}しやがつて、そんな恩施しなら、いつなと持っていけ！」

勘次は怒りのために慄^{ふる}え出した。と、彼は黙って秋三の顔を横から殴^う打った。秋三は蹠^よ跟^ろめいた。が、背面の藁戸を掴んで踏み停ると、

「何さらす。」と叫んで振り返った。

再び勘次は横さまに拳^{こぶし}を振った。秋三は飛びかかった。と忽ち二人は襟を握って、無数の釘を打ち込むように打ち合った。ばたりと止めて組み合った。母親達は叫びを上げた。彼女達は、夫々自分の息子を引き放そうとした。が、二人の塊りは無言のまま微かな唸りを吐きつつ突き立って、鈍い振子のように暫く左右に揺れていた。

「此の餓鬼めッ。」

「くそつたれツ。」

勘次の身体は秋三を抱きながら、どつと後の棺を倒して蒲団の上へ顛覆した。安次の半身は棺から俯伏に飛び出した。四つの足は跳ね合った。安次の死体は二人に蹴りつけられる度毎に、へし折れた両手を振って身を踊らせた。と、間もなく、二人は爆ぜた栗のよう^はに飛び上った。血が二人の鼻から流れて来た。

「エーイクそツ。」

「何にをツ。」

二人は再び一つに組みついた。と、また二人は安次の上へどつと倒れると、血に濡れながら死体の上で蹴り合い出した。

（大正十年）

青空文庫情報

底本：「日本文學全集 29 横光利一集」新潮社

1961（昭和36）年2月20日

1966（昭和41）年12月30日15刷

初出：「人間」

1921（大正10）年2月

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

入力：ウイルキンス賢侍

校正：米田

2012年1月4日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

南北

横光利一

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>